

震災地からの報告

(ボランティアからNPO活動報告)

金 成 義 則 (福島県いわき市在住)

葛飾・NTT柴又社宅から、いわき市に住まいを移して、12年になりました。茨城ドコモエンジニアリング、イーエンジにお世話になり、3.11 東日本大震災の時に遭遇してその月で退職を迎えた状況でした。

今、思いますといわき市にUターンして、35年ぶりに住み着いて、10年前から「町に出て、生涯学習ということをも身につけていこうと考え」それには、ボランティア活動を身近な方とあらゆる機会をとらえて、知人、友人を求めて公共の場へ週末は足を運びました。

その中に、行政主催の「いわき市生涯学習講座の中で、ボランティアコーディネーター養成講座」を平成15年に受講し、その仲間18名と其の講師いわき明星大学教授二名で当初は「ノッポボランティア活動クラブ」を発足させました。退職までは週末中心に活動しながら、その後充実させた活動に向けて平成19年3月に福島県からNPOの認証登録を受けて六年目に入りました。

いわき市を中心として主に福島県内において活動し、今後も発生するであろう地震、津波等の災害に対して地域住民側にたった知識、常識を備えた人を社会的に幅広く育成し、それを「防災リーダー」として自助・協働・互助について行政側と一体となった支援ができるよう社会貢献を目的に活動してきています。

3.11 東日本大震災以前は、防災教育セミナーなど中心に自主防災組織による地域の安全・安心を守るためにはどうしたらよいか。啓もう活動や地域防災リーダーの育成について実施してきました。

東日本大震災後は、1か月余り過ぎた4月に入っても各避難場所は、支援物資や救援活動の情報が輻輳していて、全国から入ってきたNPOや各ボランティア団体と共同で情報・支援物資の融通により目先の避難所救済に対応していた。その後行政など主な関係機関と全国から受け入れる支援物資流通拠点ができあがり、被災者との連携に落ち着きを取り戻してきたのが混乱はしているが5月に入ってからでした。

いわき市内に設置された被災者用仮設住宅は25地区に分散されて、合計2800戸の建設がされた。急ぎよ建設された仮設は、夏は暑く、結露、冬になれば暖房器具への要求や風呂の追い炊きができないなど、原発の問題や居住空間の課題など被災者支援に対する要望は限りないものでした。この中でNPOとしててっとり早くタイムリーに出来る事を考えて、すぐに出来る事と時間をかけなけ

ればできないことを新潟大学の教授や助成団体等の支援を受けながら区分しました。そこで「仮設トリセツ」(web サイト)なる日常生活を少しでも快適に過ごせる改善工夫について提案説明会を開催し、富岡町と住民との地域コミュニティづくりを支援しました。

現在の福島県いわき市は双葉八町村の原子力事故による被災者への復興に向けた「仮のまち」建設に向けた構想が急ピッチで進んでいる中で、住み慣れたまちへ五年間は帰還できないことで、私達 NPO 体制の支援の在り方や今後の活動支援体制の変化も迫られています。